女性俳人精華 100

句集

伏流水

酒寄悦子

文學の森

女性俳人精華100

句集

伏流水

酒寄悦子

文學の森

句集　伏流水　ふくりゅうすい
女性俳人精華100　第6期第9巻
発　行　平成二十七年七月二日
著　者　酒寄悦子
発行者　大山基利
発行所　株式会社 文學の森
〒一六九-〇〇七五
東京都新宿区高田馬場二-一-二一　田島ビル八階
tel 03-5292-9188　fax 03-5292-9199
e-mail　mori@bungak.com
ホームページ　http://www.bungak.com
印刷・製本　日本ハイコム株式会社
©Etsuko Sakayori 2015, Printed in Japan
ISBN978-4-86438-421-6　C0092
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

目次

伏流水

序　加藤房子　1

花衣　平成五年～十七年　15

しやぼん玉　平成十八年～二十三年　75

葉桜　平成二十四年～二十六年　137

あとがき　180

序

酒寄さんとのお付合いは師小枝秀穂女の「秀」からであるが、当時は遠距離という事もあり、お会いしたのは箱根湯本の早雲寺で行なわれた宗祇忌俳句大会か芦之湯の東光庵俳句大会の時ぐらいであったと思う。「千種」に参加して下さってから、最近は海老名、町田、横浜の句会にも遠方より出席して下さり、編集にも加わっていただいている。

天下の嶮と言われた箱根の仙石原に居を定め、大自然の濃い息吹をまともに浴びての毎日である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

立秋や峰翔下る雲の竜

黄砂降る富士は太古の貌となり

火の山に根をおろしたる余寒かな

半夏雨山河鳴らして発ちにけり

雷神の富士天頂をまろび落つ

歩を移せば富士山は間近に、遠く南アルプスの端山を望み、都会の喧騒の中に失った偉大な天然の力を身近に思い知らされる。そして森羅万象への敬畏は雄大な景となり、作品に凝縮される。

桃匂ふ微熱の如く人を恋ひ

蛍袋はほたるを知らず明けの星

九秋の初めの風のにほひかな

花蕊や千里の沖を潮満ちて

一蟬の声の落ちたる夜風かな

早春の雨の心音鳥翔ちぬ

身ほとりの小さきものへの優しい目は次第に展け、見えないものへの五感の働きを鋭くする。「九秋の初めの風」の微妙な変化、花蕊散る頃に満つ潮、千里の沖は故郷の海。夜風に落ちた一蟬の命終、真冬とは異なる早春の雨音のリズム、それらを格調高く詩い上げている。

一時期「白」に執していたのではないか、と思える作品がある。

五月雨の花はみな白九十九折

夏神楽雨に禊の白浄衣

佛性の自づと真白秋の薔薇

白き花満ちて卯月の山匂ふ

純白の山茶花闇を目覚めさす

函嶺の花みな白し夏の蝶

純白と言ふ華やかさ寒牡丹

「白」という無彩の持つ無垢の清らを「禊の白浄衣」や真白の「秋の薔薇」に、又何色の中にあっても屹立した存在感を「白き花」に発見し魅せられたのであろう。他にも「雪月夜」「雪無尽」など一望の白を思わせる佳句がある。

酒寄さんの故郷は九州、中でも石炭産業に栄えた筑豊地方である。この地は古代より豊かな田園地帯であり、その中に点々とある小山が古墳

であると伺った。女性が嫁して故郷を離れる様になったのは戦国の世からであろうか。ともあれ故郷への思い、父母への思いは時に心の痛みを伴う。

忌を重ね新樹にかすみゆく父よ
花陰やいつしか無縁の居士大姉
黄泉に発つ母を包みし花衣
故郷の山河老いけり春彼岸
父母の流転の軌跡黄砂来る
水匂ふ田に父祖の魂遠蛙
遠郭公故郷の名の消ゆるらし

両親を見送った悲しみは、自身の年齢がその時の両親の齢に近づくに

したがい、懐かしさに変ってゆく。それ故に消えてゆく故郷の名は切なく響く。

日頃の酒寄さんは、常にふんわりと存在し、細やかな心遣いで周辺の人々に寄り添うが、必ず相手との間に置く半歩を忘れない。それは人に対する礼であり、自らに課した節度によると私は考える。

そんな酒寄さんに、ふっと乙女の様なはにかみを読み取ることがある。或る時、それが普段は人に見せないロマンチシズムを、ほろと人前に吐露し、その事に自身が気付いて内心狼狽えているのだと気が付いた。

巡礼の花追ひ人となりにけり

熱さまし飲み万緑の重かりし

遠雷や薔薇に刺されし指の熱

さくらさくら忘却と言ふ風の中

角砂糖ひとつ紅茶に迎へ梅雨

花合歓や低く漢の愛の歌

「遠雷」や「さくら」の句にある若さも中々佳いが、「熱さまし」と季語「万緑」との取り合せの妙と下五の巧みさ、単なる風邪の熱ではないのだ。「花合歓」の一句は読み手の心を擽り、忘却の底に沈んでいた青春を思い出させてくれる。

仙石句会の会場はおおむね鈴木フミ子さんのお宅である長安寺さんで開かれる。此処は花の寺として名があり、座禅草、岩沙参を始めとする奥山の植物が植えられ、様々な風姿の羅漢達を巡るように花開く。又山門や本堂の軒下の彫刻はモダンな仏達の御影であり、時には美声の方丈

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

様の読経が漏れ来ることもある。

原初にておはす穂高や星月夜

静脈の新緑に沁む遊行かな

飛鳥川冬一水の無韻かな

蒼穹を色即是空しやぼん玉

一休の彫りし髑髏や雪兆す

上質な環境の中での句会では集う者の魂も浄化され、句作品も精神性の高いものとなる。よくぞ此処まで励んで来られたと称えたい。しかも仕事との両立、家庭を確と守った上での事、句作は天性のものなのだと。

最後になってしまったが、句集名の『伏流水』は酒寄さんの俳句修業の成果としての一冊として、また富士の伏流水の透明度の高さ、豊富な

水流と滋味を存分に包括した句集名として相応しい。

葉桜や学成り難く風を踏む

現在の酒寄さんにしてこの一句であることを私は身に沁みて羨ましいと思う。明日の一句の更なる展開を楽しみに、私も共々この道に精進して行きたいと願いつつ筆を納める。

『伏流水』の上梓まことにおめでとうと心よりお祝い申し上げる。

平成二十七年春満月の夜に

加藤房子

目次

伏流水

序　加藤房子　1

花衣　平成五年～十七年　15

しやぼん玉　平成十八年～二十三年　75

葉桜　平成二十四年～二十六年　137

あとがき　180

装丁　三宅政吉

句集　伏流水

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.